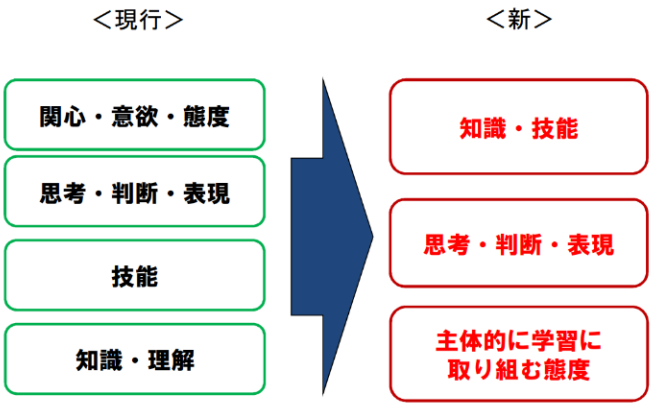
学習評価の在り方についての各校の現状と課題

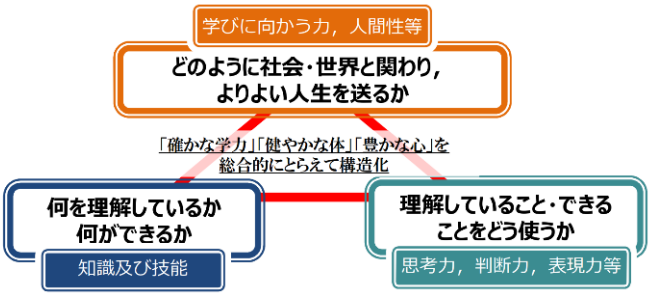
愛媛県立松山北高等学校　泉　亮太
愛媛県立内子高等学校　加藤　亮彦
愛媛県立松山中央高等学校　石川　巧

1　はじめに

令和４年度入学生より新学習指導要領となり，これまでの４つの観点「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」から，３つの観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に整理された。それに伴い，「観点別学習状況の評価」，いわゆる「観点別評価」が導入され，特に教務課や１学年担当の先生方は，研究や情報交換を行いながら，まさに今も試行錯誤されている学校が多いのではないだろうか。

そこで研究部でも，例年各校にご協力いただいているアンケートにおいて，学習評価における各校の現状や課題について調査し，情報を共有することで，今後に少しでもつながることを期待して今年度の研究を実施した。





2　アンケートの集計結果について

アンケートについては，校務系アンケート機能を利用し，主に県内県立学校と中等教育学校に依頼した。以下のデータは回答をいただいた 56 校のものであるが，アンケートを依頼したのが２学期始めであることと，記述式の回答についてはすべての回答を原文のまま掲載できていないことなどをご了承いただきたい。

(1)　定期考査とその評価について

【設問１・２】
高校１年生の１学期の定期考査の実施状況について

	回答数
中間・期末考査ともに実施	48
期末考査のみ実施	5
単元テストのみ実施	0
その他 ※	3

※　・２期生のため前期中間考査のみ実施
　　・学校設定科目の関係で２学期以降に実施

【設問３】
定期考査または単元テストにおける観点ごとのおおよその得点割合について

知・技（点）	思・判・表（点）	主体（点）
100	100	100
80	20	0
70	30	0
60	40	0
50	50	100 ※
50	50	0
50	40	10
40	40	20
40	30	30
35	35	30

※　「主体的に学習に取り組む態度」は単元テストで評価している。

【設問４・５】
学期末における観点ごとの評価の総括方法について
(愛媛県県立学校学習評価の手引Ｐ.６参照)

	回答数
評価結果の ABC の数が多いものを学期末の評価の総括とする	8
評価結果の ABC を数値化して学期末の評価の総括する	27
その他 ※	21

※
・１学期期間中に行った定期考査，小テストなどの結果を各教科で設定した割合で集計し，100 点中何点を付けられるかを計算する。その点数に基づいて，ABC の評価を行う。
・３つの観点について，それぞれ 100 点満点でつけ，その平均を１学期の評価とする。
・各観点を数値で評価し，その結果を ABC 評価に変換して実施した。また，各観点の数値をもとに学期末の総括とした。
・３観点を 100 点に変換し，平均したものを評点とした。ABC の個数は考慮しない。３観点の蓄積される点数は各教科で違うが，最終的な評価は学校で統一されたものとする。
・ABC を数値化しているのではなく，観点別に数値化された評価を ABC としているため，もとの数値を合計して学期末の評価の総括としている。
・AAA は 80 ～のように ABC の組合せによって評点を決めるようにした。

【設問６・７】
学年末における評定への総括（予定も含む）について
(愛媛県県立学校学習評価の手引Ｐ.７～８参照)

	回答数
３つの観点の評価 ABC 組合せを基に総括する	8
３つの観点の評価 ABC を数値化して総括する	22
評点を基に総括する	23
その他 ※	3

※
・評点から評定を判断するが，観点別評価を優先する。
・各学期の達成率の平均を取り，ABC に換算する。
・観点別評価と 100 点法を併用して，評価を行う。
・数値化→合計→基準を決めて ABC を決める
・数値化して評価をするが，ABC の組合せと併用して乖離があれば検討し調整をする。

(2)　観点別学習状況の評価における各校の取組と課題について

【設問８・９】
観点別評価を実施するにあたっての取組（予定）について

	回答数
学年で統一した単元テストの実施	25
学年で統一した小テストの実施	26
授業などで行動観察の記録や評価の実施	39
レポートの提出	23
ルーブリックや振り返りシートなど自己評価の実施	22
評価の際に，重視したい観点に「重みづけ」をしている	8
その他 ※	6

※
・習熟度別のため，レベルに合わせて単元別テストを行う。また習熟度の上のクラスでは，定期考査で「思考・判断・表現」のみを測るようにしている。
・パフォーマンス課題の実施
・検討中。指導についてはこれまでの方法を踏襲しつつ，評価の仕方を変えているというのが現状。
・学年で統一した課題プリントの実施
・チャレンジ問題（発展問題）に取り組み，提出させる。テスト問題の解き直しをさせる。
・本校は専門高校なので，学科ごとで，クラスの実態に応じて，小テスト等を実施。日頃のノートチェックや課題等も含めての総合評価としている。

【設問 10・11】
「主体に学習に取り組む態度」の評価方法について

	回答数
定期考査	6
単元テスト	5
小テスト	20
授業での行動観察の記録	45
課題	50
レポート	27
プレゼンテーションなどの発表	10
振り返りシート等の生徒自己評価	23
その他 ※	4

※
・授業プリントのファイル
・学年で統一した課題プリント
・ノート提出
・テストの点がよい＝主体的に学習に取り組んでいる，授業に関しては主体的ではないかもしれないが，その教科に関しては主体的だから点がよいというようなことを中学校に勤務したときに指導されたことがある。

【設問 12】
観点別評価における各学校の現状と課題について

（観点別評価全般について）
・昨年度末送付された「学習評価の手引」に基づいて，本年度から本格実施といってもなかなか難しく，試行錯誤の状態である。
・これまでの評点による評価法とは全く違う評価方法であることの意識統一をし，成績処理の際にはこれまで以上に教科会で矛盾（逆転現象）が生じていないか，基準外の評価になっていないかなどの確認を行い，特に問題なく観点別評価及び評定への総括を行うことができた。
・デジタル採点システムで定期考査を観点別に自動集計している。各観点の評価物を数値化して入力すれば，観点の評価・評点・評定が全自動で出力されるようなエクセルマクロファイルを作成しており，校内（各教科・科目）で統一的な評価方法を実現できている。教務規定が従来の考査重視型のあり方に基づいている部分があるので，教務規定を観点別評価に即したあり方に見直していこうとしている段階である。
・様々な研修会で得た情報をもとに準備していたものと 8 月の教育課程研究集会で聞いた他校の状況に差があるようなので，２学期中に修正していきたい。
・今年から導入され教務・情報課を中心に手探りで実施している。これから他校の状況を聞きつつ，より良い方法を模索していきたい。
・授業を行う上で，観点別評価を取り入れることで指導方針や指導内容の精選，指導の改善が行われるなど，肯定的意見も多数あった。
・評価方法が多様化し，正確に評価できるようになった一方で，システム化できていない分教員の負担が増した。
・章のまとめとしての時間の確保や，客観的な評価の勤務時間での時間確保が課題である。
・定期考査に偏りすぎないように生徒の様々な取組を評価することが難しい。時間や内容（評価規準），授業時数の確保，客観的な評価が課題である。
・煩雑化すると本来の目的以外のところで時間が掛かるので，できるだけシンプルに得点化できないか模索している。
・ややこしい。この評価のメリットを私自身がよく理解できておらず，デメリットの方が今は大きい。
・観点別評価をする必要性が感じられないので，無駄な時間を取られ，相当な負担である。
・「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の評価に時間がかかること。また各教科で単元ごとに観点別の評価規準はなかなか作れない。（そんな時間がない・・・）むしろ県下で統一のものにはできないのだろうか。
・教科ごとに評価の手順が違うため，観点別の ABC 評価の規準がバラバラである。生徒からすると，この教科はこれでＡなのになぜこっちの教科ではＢなのだろう？と疑問を与えかねないと感じる。校内で評価方法を統一したほうが良いのではないかと思う。
・学校ごとで違いが出てくるのは仕方がないことであるが，この評価が入試に活用されるおそれがあると考えると不安が残る。
・手探り状態である。もっと効率のいい評価の仕方があるか模索している。
・観点別評価に伴い，考査の点数が低くても，学期の成績が 30 点を超えることがあるため，考査に対する意識が下がることが考えられる。今後，対応

したいと考えている。
・定期考査の比率が低くなって評価しづらい。
「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点を授業時の様子（単元テストなど）からも評価していくとなると，定期考査の素点の重みが少なくなってしまうのではないかと感じる。
・定時制課程であり，評価そのものが難しい現状にあり，試行錯誤の状態である。
・教科の特性をどの程度評価へ落としこむのかということが曖昧である点や，考査の難易度によって生徒の評点が大きく左右するような状態が起こりうるという点などが考えられる。
・四則演算が十分ではないが，真面目に授業に参加し，提出物もきちんと提出できる生徒の観点別評価に，ＡとＣが混在する場合がある。ＣをＢにできるよう個別に指導をしたが，つまずいている内容が四則演算なので，定期考査等での成果につなげることができない。
・不登校で授業に参加していない生徒の評価が厳しくなる。
・あまり画一的な評価規準(基準)とすれば，多様な生徒への対応に矛盾が生じる可能性がある。
・ACC や AAC といった偏りが発生した生徒の評価をどうするか。
・学校によって異なるのは仕方ないが，学校によって全く異なるのもどうかと思う。
・評点の平均点を既定の範囲におさめる際に苦慮した。観点「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を検討していく必要がある。
・毎時間の授業ですべての観点を正確に把握・評価できているのか。その評価は本当に生徒の評価として有効なものか。
・定期考査において，教科によっては「思考」を評価する問題の作問が難しい場合がある。
・４月に教務課により学習評価の検討会が開催されたが，ほぼ全てが各教科に委ねられた。各教科への手引きコピーの依頼，手引きをより抜いただけの資料配布，教科主任だけを対象とした先の検討会などで，全教職員への周知・徹底は見られない。何ともお恥ずかしい限りである。
・定期テストをなくしてはどうか。
（各観点それぞれの評価について）
・「思考・判断・表現」を「知識・技能」とあわせて定期考査で評価すること。
・１年目ということもあり，「思考・判断・表現」の評価が厳しめになったので，改善していきたい。
・本校では，考査によってのみ「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価することになった。そのため，この２つには小テストやレポートなどが全く含まれていないことが今後の検討課題である。
・準備不足もあり，「知識・技能」，「思考・判断・表現」の２つを区別して評価ができなかった。
・定期テストでは，問題の評価を「知識・技能」と，「思考・判断・表現」に分けて作成しているが，「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しい。
・「主体的に学習に取り組む態度」の評価を点数化するのがほかの２観点に比べると難しい。
・同じ学年を複数の人で担当したとき，「主体的に学習に取り組む態度」の成績を同じ基準でつけることが難しい。
・「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しい。誠実に取り組むこととその先を究めようと取り組むことは異なるが，その違いは学力（知識や思考力など）が基盤となっているため，主体性のみの評価が困難に感じる教科もある。
・１学期は手探りの状態であった。特に「主体的に取り組む態度」については，定期考査を材料に含めないため，どのように評価すべきか，検討している段階である。
・「主体的に学習に取り組む態度」の評価に難しさを感じている。課題，授業プリントのファイルだけでなく，授業における行動の記録の仕方を研究していかなければならない。

３　アンケート結果から

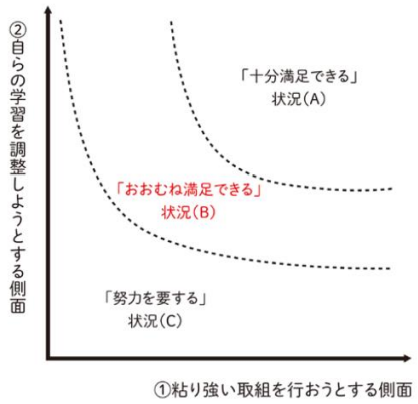
(1)　定期考査とその評価について

定期考査については，「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価する判断材料に用いており，これまでの評価方法に近いようである。また，「主体的に学習に取り組む態度」を定期考査で評価しているという回答があり，アンケートの時期が１学期末考査後であったこともあり，各校で試行錯誤されていることがうかがえた。

学期末の観点別評価については，数値からABC に置き換えている回答が多かった。学年末の評価についても，アンケート実施時期の段階ではABC の組合せを基にする総括よりも，数値化したものや評点を基に総括すると予定している回答が多かった。また，数値を基に評価はするが，ABC の組合せと比較して乖離があるものは検討するなどの回答も見られた。学年末の評価については，今後も検討し，修正していく段階である。

また，私自身も実際に観点別評価を実施してみ

た中で，評価をする上で定期考査の得点の比率が低くなっていると改めて感じた。従来の「考査得点７割・平常点３割」などといった評価方法から，定期考査の得点だけに偏らない多様な評価に変化していく必要がある。アンケートの回答で「定期考査をなくしてはどうか」という意見が複数あった。実際に，中学校ではそういった議論も進んでいるようである。「定期考査の意味や必要性」などを改めて考えながら，高等学校での学びの在り方が大きく変わる時期なのかもしれない。



(2)　観点別学習状況の評価について

高等学校における観点別評価の導入については，これまでにない非常に大きな変化であり，各校でも非常に多くの課題を抱えている状態であることがアンケートの回答からも容易にうかがえた。これまで通りの「課題」や「提出物」「小テスト」に合わせて，「レポート」「パフォーマンス課題」「ルーブリック等による生徒自己評価」などを活用しているとの回答も多く，各校での新たな取組が見られた。これらを，どのように数値化して，客観的な評価につなげているかについては，今後も情報を共有しながら試行錯誤していく必要がある。

課題として特に多かったものは，やはり「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関する課題であった。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（文部科学省国立教育政策研究所）』の中では，「①知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で，②自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価すること」とある。従来のいわゆる「平常点」に比べて，より多様な方法で細かい評価をする必要があり，今年度は特に負担が大きい。評価規準やシステムも固まっておらず，評価にこれまで以上に時間がかり，評価が大学入試にどうつながっていくかが不透明なことなどがあり，今年度は手探りの状態で進んでいるのが現状だと感じた。

しかし，今年度も各校で様々な取組が試されていることもアンケートの回答でわかった。様々な実践事例を参考にして，柔軟に軌道修正して，各校に合った評価の形を見出していければよいのではないか。

4　終わりに

今回のアンケート調査・研究を通して，今年度の「観点別評価」の導入は，これまでにないくらいの大きな変化であると改めて感じた。しかし，大切なことは「評価をする」ことではなく，その先の「生徒を前向きにして学習改善に生かす」「教師の授業改善に生かす」ことが重要である。そして，時代に合わせて「これまで慣行として行われてきたことでも，必要性・妥当性が認められないものは見直していく」ことも大切である。そして，客観性のある評価を行うためには，数学科だけでなく学校全体で共通理解の上で取り組んでいく課題でもある。

私自身も今年度は高校１年生を担当し，小テストや課題，考査問題や振り返りシートなどを作成している。その中で，これまで以上に生徒に身に付けさせたい力を考え，そのための授業準備や改善，考査後の振り返りとフィードバックなど，改めて教員としての在り方について考える機会が増えた気がする。「観点別評価」によって、これまで以上に業務が増え，多くの時間を使っている。今後は生徒の学習改善とともに，自分自身の授業改善につなげていきたい。もちろん個人でやれることに限りがあるので，校内の数学科や他教科と連携し，他校の先生方とも情報を共有し，試行錯誤しながら評価の在り方について考えていきたい。研究委員会では，今後も調査・研究を継続していき，各校の情報共有の手助けとなれるように取り組んでいきたい。

最後になりましたが，新学習指導要領や観点別評価の研究，インターハイの愛媛開催などが重なり，例年以上に多忙な中でのアンケート調査への御協力，丁寧な御回答，御意見をいただき本当にありがとうございました。研究委員会では，今後も研究を重ねていく所存ですので，各先生方から幅広い御意見をお寄せいただいたら幸いです。

（参考資料）

「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）
解説　数学編　理数編」（文部科学省）
「国立教育政策研究所ホームページ
（https://www.nier.go.jp/index.html）」